

▷子どもノンフィクション文学賞 ◇

選考委員特別賞
最相葉月賞

脳梗塞という病気

筑波大学附属中学校 一年 堂本 和希

平成二十八年 八月十三日

朝、僕達家族は、母の姉である伯母と共に車で昭島の祖母の家に向かっていた。目的は、“みんな”的お誕生日会のためだ。上半期の家族みんなのお誕生日を一同に祝う、年に一度の行事であるため、僕はとても楽しみにしていた。

祖母はいつも、僕達が到着する時間を見計らって、台所で忙しそうに料理をしていた。僕達を喜ばせるために一生懸命。そんな祖母を気づかって、予定より到着が遅

れそうなことを伝えるため、母が車の中から祖母に電話をした。

ブルルル・ブルルル・

「でないね。買い物でも行つてるかな…。」

足りない食材があると、いつも、自転車で近くのスーパーまで行つていた祖母を思い出したが、その時、何となく嫌な空気が流れた。

途中、母と伯母とで何度も電話をするが、やはり繋がらなかつた。

「買い物にしては長すぎるね。」

何となくの嫌な空気は本格的なものになつてきた。

祖母の家に着き、到着の電話をかけた。いつも通りなら、祖母が玄関に出て、僕達を出迎えてくれる。しかし、電話も繋がらないままであつた。トイレに行きたがつていた妹のために伯母が鍵を開け家中に入ろうとした。ドアが開かない。鍵を開けても中からチエーンが掛けられていてドアを開けることができなかつた。僕は怖かつた。祖母の身に何が起つたのか、考えると、怖くて

鼓動が速くなつていくのを感じた。

母と伯母は何とかドアを開けようとしたが上手くいかない。すき間から手を入れてみたり、チエーンを切ろうとしたり。しかし、救急隊員のような装備があるわけでもなく、焦りだけが大きく膨らみ、僕は居ても立つてもいられなかつた。すると、家の中から祖母の声らしきものが聴こえてきた。

（生きてる！）

安心とともにかく早く助けなければという焦りのまま、母たちより腕の細い僕が試してみたが、やはり駄目だつた。その時母が、幼い頃の記憶をたどり、あることを思い出した。

（開けられる！）

幼い頃に、祖母に叱られ家の外に締め出された母は、チーンの外し方を習得し家の中に入つたという。その時の要領で試してみると、古いドアがミシミシと音を立て開いたのだった。

僕達は、祖母の方に急いだ。祖母は自室の前で寝

巻のまま倒れていた。

「助けて。誰か、お水ちょうだい。」

祖母は動けないようではあつたが、しつかりと言葉を発していた。僕は急いでコップにお水を汲み、祖母のもどへ持つていつた。しかし、倒れている祖母は飲むことができず、母があわててストローを持ってくれた。その時、伯母は救急車を呼んでいた。救急車は五分ほどで到着したが、僕にはものすごく長い時間に感じられた。

男性三人、女性二人、計五名の救急隊員が祖母の様子を確認している。母と伯母は熱中症か何かか、と話していたらしいが、僕は邪魔になると思い、家の外に出た。外の階段で座つていると、近所のおばさんが声をかけてくれた。

（どうしたの？）

「おばあちゃんが倒れちゃつて…」

「安村さんのどこ？」

「そうです。」

「大変ね。大丈夫？」

▷子どもノフィクション文学賞 ◇

「救急車がきたのでたぶん大丈夫だと思います。」

「安村さんには夫が亡くなつた時に助けてもらつたから、今度は私たちが助けてあげる番ね。」

そんな話をしていたら、祖母が救急隊員に運ばれて降りてきた。気付いたら、たくさんの祖母の知り合いが集まっていた。そのまま祖母と伯母は救急車に乗り、僕達家族は母の運転する車で後を追つた。

東京西徳州会病院。祖母が二週間後に手術を受ける予定であった病院である。祖母の倒れた原因是脳梗塞であった。以前より不整脈の治療をしていた祖母は、心臓のカテーテル手術をしていた。今回も、その二度目のカテーテル手術の準備をしていたところであつたが、手術を待たずには、心房細動により血栓が脳にいってしまつたらしい。祖母は集中治療室に運ばれた。

祖母の家の新聞受けに、朝刊が二日分たまつていた。

祖母が寝巻姿で倒れていたことから、祖母は、十一日の夜、寝ている間に脳梗塞になり、まる一日そのままの状態で、僕達の行く十三日の朝まで、ずっと一人で苦しん

でいたことになる。病院の先生にも、

「(発症から)時間がたち過ぎてるので、手術はできません。」

といわれたらしい。祖母は、左半身麻痺に加えて半盲という状態になつた。半盲というのは、視界の半分だけ見えなくなるものであり、祖母は、お盆の上の左側のご飯や、左側に立つ僕達に、気付けなくなつてしまつた。耳も聞こえにくくなつたのか、声も大きくなつていて、なんだか祖母が、違う人になつてしまつた気がして、ぼくは悲しくなつた。

その晩、伯母が僕と妹を気づかつて、

「お誕生日会しよう。」

と言つてケーキを買つてくれた。僕達は、祖母のいないさみしい祖母の家でケーキを食べた。長い一日が終わつた。

八月十四日

静かな朝だった。僕が朝ごはんを作った。目玉焼きと、なすとピーマンの炒め物、ハムとソーセージを焼き、きゅうりを切った。母に手伝ってもらつたが、我ながら上手くできた。夏休みの宿題の“朝食作り”だ。祖母と一緒に作るつもりだつたが、とりあえず、祖母の家にあつたものを使い切り、朝食を作つた。

この日は、母がみんなにお誕生日プレゼントとして準備していた『スノーヴィア』の舞台を見に行く予定だつた。

もちろん祖母も一緒に。僕は、昨日のことで、そんな気分ではなかつた。ただ、病院にいても僕達ができることは外で待つことだけである。結局、祖母の分まで楽しむことにした。

八月十五日

毎日、祖母と仲の良い近所のおばさんが声をかけてくれる。食べるものを持ってきてくれたり、気にかけてくれる。

祖母が転院した。本格的なりハビリを始めるため、五反田のリハビリテーション病院に移つたのである。これから五ヶ月、もしくは六ヶ月、この病院で祖母は頑張るのだ。

ベッドで寝たきりであつた祖母はおむつをしていた。これからは自分の足で立ち上がり、トイレで用をたすという。ずっと病院のパジャマのままであつた祖母は、これから毎日、朝晩着替えるらしい。もちろんヘルパー

僕達は家に帰ることになつた。もともとの帰省予定通りである。病院の祖母に声を掛けてから、車で帰路についた。

帰る途中、多摩川河川敷で行われていた、大田区の『花火の祭典』にぶつかつた。車中からの花火見物だつたが、心が和んだ。

これから、どうなつていくのだろう。

八月三十日

第9回
◀子どもノフィクション文学賞 ◻

さんや看護師さん、療法士さんたちに手伝つてもらいながらだが、前の病院でのリハビリを見る限り、相当大変だと思う。祖母はリハビリを嫌がつていた。

九月二十五日

妹が母と伯母と一緒に祖母のお見舞いに行つた。リハビリの様子を動画で撮つてくれたため、僕も家で祖母の状態を知ることができた。

祖母は病院の中を足首の補助器具をつけて腰を支えられながら歩いていた。「いち・に、いち・に」と掛け声をかけながら、すごいスピードで歩いていた。僕は驚いた。

祖母は理学療法士の“島先生”をとにかく信頼しているという。“島先生”的リハビリにより、祖母はグングン身体の機能が改善していっているらしい。祖母が“島先生”を信頼している理由は何だろう。僕は考えた。それと同時に、自分も祖母のような人たちの手助けをする、

理学療法士になりたいと考えるようになつた。

十一月三日

母と妹は毎日のように、祖母の病院を訪れていた。受験生の僕と仕事の忙しい父はなかなか祖母のもとへ行くことができなかつたのだが、この日は、久しぶりに祖母に会うことができた。

家族みんなで祖母のリハビリを見学した。この二ヶ月ちょっとで驚くほど動けるようになつていていたのだが、この頃の祖母は、一日のリズムが上手くつくれなかつたために、飲む薬を増やしたらしく、なんだかぼんやりしていた。目がトロンとして今にも眠つてしまいそうだった。

担当の“島先生”と一緒に屋上庭園でリハビリをした。

「安村さん、背中！ 視線は上！」

という先生の言葉に祖母はまるまつた背中をピンと伸ばすように、上を向いて「いち・に、いち・に」と歩いて

いた。薬のせいか、どこか違うところに心があるみたいな顔をして。補助器具は付けていなかつた。以前の動画よりも勢いがなく不安定な感じがした。その後、久しぶりに会つた僕達は祖母と庭園のベンチで写真を撮つた。

祖母は“島先生”以外の先生のリハビリにはあまり積極的になれていなかつた。脳梗塞の影響により、感情のコントロールができなくなつてしまつていらし。だから、信頼している“島先生”以外は信頼できない＝嫌い、となつてしまつていたのではないだろうか。好き嫌いで言うと“島先生”は若くて僕達から見てもかつこいい。だか、容姿の問題だけであれば、他にもたくさん若くてかつこいい先生はいた。そのため、出会つてしまはる。しかし、すぐに祖母は

「あの人嫌。」

となつてしまふのだ。

祖母は“島先生”を頼りにしていた。理学療法士としての技術も、他の先生たちよりも高いように感じる。そ

のため、祖母はリハビリ中も怖さをあまり感じないのだといつてた。また、祖母と正面から向き合い、祖母の身体の回復を本気でサポートしてくれていた。だからこそ、祖母は“島先生”を信頼していたのではないだろうか。

他の先生がリハビリの担当になつた時、祖母は「怖い」「もうやめて」と口にすることがあつた。祖母が慣れていない他の先生たちはまず、祖母とつながろうとする。限られた時間のなかで祖母にリハビリに前向きになつてもらおうとするあまり、表面的な言葉のやり取りになつてしまふ。そのため祖母は、何かに勧誘されないと勘違いすることも多くあつた。そう考えると、毎日色々な先生が関わるリハビリのシステムは、祖母には不安であつたのだと思う。

さらに、トイレに行くために人を呼ばなければならぬ。自分の好みの味付けではない病院の食事。夜眠れない。そして何よりも、ここがどこで自分がなぜこの場所にいるのか。なぜ家族と一緒にいられないのか。分から

第9回
△子どもノフィクション文学賞〇

ないことばかりなのに、ついさっきのことを忘れてしまう。だから全てのことを強制されているようを感じる。色々なストレスが重なり、更にそれが恐怖となつて、祖母を襲っていた。その時は、僕には祖母の頭の中が理解できなかつた。だから、常に泣いたり怒つたりしてしる祖母が恐かつた。

十二月一日

妹が、病院でさみしがる祖母のために、ぬいぐるみの“ぐまちゃん”を準備した。幼い頃の自分のワンピースとカーディガンを着せて。

十二月七日

十一月の中頃から、インフルエンザ予防のため、祖母のいる病院は子どもが入れなくなつた。毎日顔を出していた妹も、祖母の病室には行けなくなつていた。

この日は、入口ロビーで僕と妹が祖母を待つた。病室に行けないかわりに、祖母に外に出てきてもらう作戦だ。いつも自動演奏で色々な音楽が流れているグランドピアノの横には大きなクリスマスツリーが飾られていた。祖母は、僕達の顔を見ると、喜んで涙を浮かべた。しかし、僕らの年齢はいつも定かではなく、小学生の僕に

「和希は中間テストおわったの？」
とか、

「和花ちゃんは保育園？」

と質問をする。ちなみに、妹はこの時小学校三年生である。

祖母とのおしゃべりを楽しんだ後、僕達は、クリスマスツリーの前で写真を撮ることになつた。母が、受付の人へ写真を撮つてもらえるよう頼んでいると、何だか祖母が落ち着かない様子であつた。僕達がそろそろ帰ると、いうことを気にしているらしい。祖母は倒れてからいつも、僕達の帰りをものすごく嫌がる。さみしいと言つて、不安になり、イライラし始める。この時もまさにそんな

感じだつた。

受付の人が来て、母が祖母の車いすをクリスマスツリーの前に押していくと、

「何でこんなことしなきやいけないのよ！」と祖母が怒り始めた。それでも、祖母をなだめながら、僕達は写

真を撮つた。後で見たら、笑顔の僕達と、ものすごく変な顔をした祖母が写つていた。

十二月二十四日

祖母が倒れてから、初めてのクリスマスイブ。伯母はいつも祖母と過ごしていた。だから、この日は、僕の家に泊まりに来た。みんなでチキンを食べた。

平成二十九年 一月三日

祖母からお年玉をもらつた。この日に僕を除く僕の家族は、祖母に新年のあいさつをしに行つていた。僕は塾

の正月特訓で行けなかつた。直接お礼の言えなかつた僕は、お礼のメッセージを動画で撮つてもらい、祖母に見てもらうこととした。どんな顔で見てくれるか、少し楽しみだ。

一月二十六日

祖母は、前日に、病院中の人とお別れをして、新しい場所に移つた。平成扇病院。母と伯母が色々な場所をまわつてようやく探し出した病院だ。祖母は身体の機能回復は進んでいたが、少し前まで生活リズムが整わず、薬漬けのような状態になつていて。夜眠れずに起きて騒いでしまうことが、一番の原因だ。五反田のリハビリテーション病院の退院直前に一度だけ、外来で他の総合病院の精神科にかかり、何となく薬の調整が上手く行き始めた時だつた。そのため、今度の病院は、精神科専門の病院である。祖母にどつては三度目の入院となる。母と伯母の二人で、祖母の転院を手伝つた。祖母は、

第9回
△子どもノフィクション文学賞〇

慣れ親しんだ五反田の病院や先生たちから離れたさみしさと、新しい場所での不安で、パニックになってしまつたらしい。

主治医の先生の説明によると、祖母の脳はまだ完全に固まつていないらし。怪我をした時のかさぶたのように、まだなつていないことだ。そのため、これからもまだまだ変化をすることなのだという。

この病院で何とか穏やかに過ごせるようになると良いと思う。

二月十二日

ようやく受験も終わり、僕は、母と妹と一緒に祖母のお見舞いに行つた。平成扇病院になつてから初めてのことである。こちらは、子どもも入室禁止にはなつていなかつた。その代わり全員マスク着用だ。

この病院では以前のようなりハビリはない。作業療法士の先生が、毎朝、体操と塗り絵などのちょっとした活

動を準備してくれるのみである。祖母は自分から何かをしようという意欲もなく、暇を持て余していた。そうすると、さみしさばかりが募つてくる。病室にこもつて身体も動かさず、せつかく回復した機能も、またもどに戻つてしまふような感じがした。

案の定、この頃の祖母は転んだ時につくつた痣が、顔や体にたくさんあつた。そのため、僕達は、一緒に体操をすることにした。五反田で“島先生”に教えてもらつたストレッチと、もう一人の大好きな先生から指導をしてもらった『原茂体操』。もちろん、この体操はそのままの名前をとつてている。

祖母は僕達と病室で身体を動かしながら、懐かしそうに、五反田の話をしていた。ちゃんと覚えていた。

三月二十一日

いよいよ祖母の新しい生活が始まる。この日から祖母は、足立区の『銀木屋』というサービス付き高齢者住宅

で生活をすることになった。サービス付き高齢者住宅と言つても、僕や母が最初に見つけたところとは、全く違つて、この『銀木犀』は、祖母が“生活する”姿が想像できた。母も伯母も、楽しく笑いながら、日々を安心して過ごせる場所だと確信し、選んだという。建物の創りや内装も考えられていて、僕達が行つても、落ち着く空間だ。そして、何よりも人が良い。祖母に接してくれる人がみんな温かい。この『銀木犀』もWebリーフレットにも、一ページ目に「高齢者住宅というのは、思いやり、やさしさなんだと思う。」と書いてあつた。本当にその通りの場所だと思った。

事前に、僕達は部屋に合つた家具をそろえたり、祖父の仏壇を昭島から運んだり、準備をしていた。これからは、ここ『銀木犀』が“祖母の家”になる。僕達はここを拠点に集まることになった。

二人の先生は時間通りに、一階のロビーに降りてきてくれた。二人とも祖母を見て喜び、祖母と握手を交わした。思い出話は尽きず、あつという間に先生たちの休憩時間は終わってしまった。

名残惜しかつたが、僕達家族がお世話をなつた先生たちに会うことができて、僕も嬉しかつた。祖母は喜びの

僕の小学校の卒業式。着なれないスーツを着たまま、家族で『銀木犀』に行つた。祖母とおやつを食べ、卒業式の撮りたてほやほやの写真を見てもらい、ゆっくりと午後の時間を過ごした。僕達が帰る時にはまた泣いてしまつたが、祖母は新しい場所で頑張つていた。

五月五日

祖母が待ちに待つた、島先生、原茂先生との再会の日である。いつもよりも少しだけおしゃれをして、僕達家族と、伯母と一緒に、車で五反田のリハビリテーション病院に向かつた。

三月二十三日

▷子どもノンフィクション文学賞 ◇

あまり、興奮していた。五反田のリハビリテーション病院を退院して以来、一番の良い顔をしていたのではないだろうか。二人の先生は、祖母にとつて本当に大切な人なのだと感じた。

五月二十一日

久しぶりに、“祖母の家”に行つた。祖母の部屋は駐車場のある庭に面した一階である。車が到着してすぐに、僕と妹が祖母の部屋の窓を軽くたたくと、テレビをつけたまま、ベッドで横になっていた祖母は、驚いて飛び起きた。僕達が、玄関に回つて祖母の部屋に向かうと、祖母はすでに部屋の外に出て、僕らを出迎えてくれていた。歩くこともかなりしつかりとできるようになつてきていた。

この日は、祖母のお昼ご飯をキャンセルして、僕達と外食することにしていた。近くの回転寿司屋さんだ。祖母はお寿司が好きである。『銀木犀』では、入居者さん

のリクエストで、生魚も食事に出てくるようだが、やはり頻度は少ない。だから、僕達や伯母が行くと、一緒にお寿司を食べることが多い。しかも、回転寿司は、待たずに入ることができる。祖母は待つことが嫌いだ。倒れてからはなおさらだ。

母の車に祖母が乗つた。普通の乗用車より車高の高いワゴン車のため、祖母が後ろに倒れないように、母が背後でサポートをした。ほどんど母が触れずに、祖母は車に乗ることができた。どんどんできることが増えている。

回転寿司屋さんの開店と同時に、入店したため、全く待たずに席に着くことができた。実は僕も寿司は大好物である。みんなでお腹いっぱい食べた。

『銀木犀』に戻つた。母が車を駐車している間、僕が祖母の手を握り、玄関まで進むことになつた。祖母が転ばないように気をつけた。しかし、玄関に着いたところで大失敗をしてしまつた。祖母が元気になり、油断をしてしまつたのだ。祖母は左側に注意をむけることが苦手である。元気になつた今でもだ。そのことをすっかり忘

れて、僕は祖母の右手を握っていた。そして、僕が右側に付いたまま玄関を通過してしまったのだ。祖母は左半身を玄関の端に激突させてしまった。

「痛い！」

祖母の声で、母が駆け付けた。肩を打つてしまつたようで、僕は、母に不注意を叱られた。幸い、大事には至らなかつたが、本当に危なかつた。以後気をつけなくてはならない。後で、祖母にも謝つた。

六月十八日

この日は、父も一緒に『銀木犀』だ。やつぱりお寿司を食べに行つた。デザートも含め、本当に腹いっぱい食べた。しかし、帰りがけに、近くのドラッグストアで、大量にお菓子を買い込んだ。

祖母は、おやつをよく食べる。一度の食事はそれほど多く食べないが、ちょこちょこ「おなかがすいた。何か食べるものある?」と言つてお菓子をつまむ。僕達が行

くと、かならず午後は、食堂の大きなテーブルで、おやつ大会だ。僕達は勉強をしたり、読書をしたり、祖母も塗り絵をしたり、おしゃべりをしたり、それぞれがゆつくりと過ごしながら。

七月十七日

伯母が引っ越しをした。祖母が倒れてしまつたことを機に、それまでのシェアハウスを離れ、新しく家を購入したのだ。その家を初めて訪れる。シェアハウスの時は男子禁制ということで、僕は子どもながら入ることができないなかつた。というより、必要のある時のみ、遠慮をしながら足を踏み入れていたという感じだ。今度は伯母だけの家のため、安心して入ることができる。

僕と妹と母とで、『銀木犀』に祖母を迎えて行つた。

祖母と一緒に、伯母の家を訪問する。みんな楽しみにしていた。伯母の家は日本橋にある。そのため『銀木犀』からは三十分程で到着した。引っ越しをしたばかりの伯

△子どもノンフィクション文学賞 ◇

母の家は、最低限のものしか置いていなかつたため、まだテーブルや椅子はなかつた。そのため、祖母は引っ越しの中身の詰まつた段ボールに腰掛けることになつた。

祖母が、よく言う言葉。「私も一緒に行っちゃおうかな」

さみしくなると、よくこう言つて、母や伯母の様子をうかがう。祖母は本当にさみしがり屋だ。きっと、倒れる前から、一人で暮らすことや、僕達になかなか会えないことが嫌だつたのだろう。倒れてからは、それまで以上に感情のコントロールが難しい。だから、いつも「さみしい」「帰らないで」と訴える。この日も僕達が帰らなくてはならないと話し始めた時に、「一緒に行つちゃおうかな」と祖母は笑いながら言つた。でも、冗談というよりは、「行つていでしょ?」というお願ひの言葉だ。当然母も伯母も、良いとは言えず、祖母が自分の家に戻る選択ができるよう、話をする。祖母も辛いが、母と伯母も辛いと思つた。

夕方から、僕の塾があつたため、祖母を『銀木犀』に

送り、僕達は急いで帰宅した。

八月十二日

朝、僕達家族は、母の姉である伯母と共に、車で出かけた。一年越しの“みんな”的お誕生日会だ。行き先は、もちろん祖母の待つ『銀木犀』。以前のように、祖母の作る料理や、大きなバースデイケーキは準備できなけれど、僕も妹も本当に楽しみにしていた。

祖母の家に着き、母が祖母に「今日はみんなのお誕生日会です!」と楽しそうに伝えると、祖母は

「えーっ!!」

とよろこび、満面の笑みを浮かべていた。

早速僕達はプレゼント交換を始めた。お誕生日だが、一度に複数の人間の誕生日を祝うために、互いにプレゼントを渡し合うプレゼント交換が、僕達のやり方である。(下半期の誕生日の父と母は、プレゼントを渡すだけだ

が…)

まずは、一番早い誕生日、七月生まれの妹から、祖母の部屋のベンチ、まさにお誕生日席に座つて、家族みんなからお祝いをしてもらつた。次が、八月生まれの祖母、そして九月生まれの伯母、十月生まれの僕という順番だ。みんなでみんなのお誕生日を祝い、その後、外のレストランに食事に出かけた。祖母の希望により焼き肉を食べられるレストランだ。みんなお腹いっぱい食べ、大満足のお誕生日会だつた。

祖母の家に戻つてからは、本を読んだり、おしゃべりをしたり、以前の祖母の家の時のように、それぞれがゆつくりと過ごした。みんなで泊まれないこと以外は、以前の祖母の暮らしに近づいたように感じた。

八月十三日

この日から三日間、以前の祖母の家『昭島』に行く。丁度祖母が倒れて一年たつた。以前の祖母の家は片づけ

をして、貸しに出すことになつた。その片づけをこの三日間で、家族総出で行うのだ。

祖母が倒れてから、電話を止めた。水道とガスも止めた。冷蔵庫があつたため、電気だけはそのままになつていた。今回は、泊まりがけで片づけをするため、水道は復活させた。

朝、出かける前に、スーパーで食材を買い込んだ。オーブンレンジやホットプレートで作れるもの、もしくは火を通さずに食べられるものばかり。電気と水道が使えれば、生活には困らないが、何となく、ガスが使えないだけで、キャンプの時みたいな感覚があつた。

一日片づけをして、汗だくなつた僕達は、近くの銭湯に行つた。インターネットでも噂の広まつてゐる、居心地の良い銭湯であつた。一時間程ゆっくりと過ごし、本日の宿『昭島』の祖母の家に戻つた。

八月十四日

第9回
△子どもノフィクション文学賞〇

朝から前日の続きの片づけを始めた。ハウスダストのアレルギーのある僕は、くしゃみが止まらず、あまり戦力にならなかつた。そのため、埃の影響の少ない、外での力仕事を任された。この日だけで、大きなワゴン車四台分の廃棄物が出た。一軒の家を処分するということは大変なことだと感じた。僕はへとへとに疲れた。

この日は、食材も尽きたため、夕飯を外で済ませ、またあのいかした錢湯へいった。

八月十五日

最後のゴミ捨てを終え、僕達は祖父の墓参りにいった。久しぶりの墓参りだつた。これからも、拠点が足立区に移つたため、なかなか来ることができなくなる。祖父のお墓を綺麗に掃除した。

昼食を済ませ、みんなで祖母のいる『銀木犀』に行つた。いつもなら、昼食と一緒にとつたり、比較的長い時間と一緒に過ごすのだが、この日は、午後の短い時間で

あつたため、祖母は泣いていた。夕飯と一緒に食べないということで。そして、次にいつ会えるのかと泣いていた。母と伯母で色々な話をしながらだめると、落ち着いて、僕達と楽しくおやつを食べることができるようになつた。

この日は、『昭島』から運び出した、母と伯母のピアノが『銀木犀』に届くことになつていて。しかし、あいにくの雨の影響で業者の搬入時間がかなり遅くなつていた。結局、一緒に食堂で食事はしないが、祖母は食事を終えて自分の部屋に戻つてからも、ずっと僕達と過ごすことができたのだ。

ピアノの到着を待つ間、『昭島』から持つてきた祖母のお手玉を渡すと、祖母は昔を思い出し、歌いながらお手玉で遊び始めた。初めは両手を使おうとしていたが、上手くいかず、片手で二つのお手玉を投げていた。祖母は「昔のように上手くいかない」とすぐに諦めて止めてしまつたが、僕達がおもしろくなつて本気で練習をしていると、だんだん祖母も積極的に立ち上がり練習をす

るようになった。立つてお手玉をするのは本当にバランス感覚が必要だと感じたが、祖母は最終的に十回以上続けて、片手のお手玉ができるようになった。もつとできるという思いがあつたのか、祖母はとても悔しがつていたが、そのバランス感覚や、床に落ちたお手玉を拾うため、何度も不安定な姿勢を不安なくどることができる祖母の回復ぶりがすごいと思った。

そうこうしていると、業者の車が到着し、『銀木犀』に母と伯母のピアノが届いた。祖母も嬉しそうにしていた。

「何か弾いてあげなさいよ。」

母にむけ、祖母が言つた。一緒に搬入に立ち会つた、所長さんや他のスタッフさんに音楽をやつている娘を自慢したかったのだろう。

母が、簡単な曲を一曲弾くと、

「次は歌つたら? もつとみんなが知つていそうな曲を。」

と、二曲目を催促した。さすがに夜遅い時間であつたた

め、歌はまたの機会にということになった。でも祖母は満足そうにしていた。

祖母は五反田のリハビリテーション病院に入院した時は、「杖をついて、歩けるようになつたら良いね。」と言っていた。最大限やつてそこが祖母の到達点だということだ。しかし、今の祖母は立つて何も持たずに一人でトイレに行く。片方の脱げたかかと付きのスリッパを片足で立つて履きなおす。立つたままコップに水を注いだり、床に落ちたモノをしゃがんで取ることもできる。そして立つたままお手玉まで。これまでのたくさんの人との関わり合いの中で、ここまで身体機能の回復を遂げたのだ。

今のが医療は、それぞれの病院に、それぞれの専門分野が備わっている。それはとても大事なことであるが、僕はそのことに何となく違和感を覚えた。専門分野が決まっているために、制限される動きも多くあつたからだ。そのため、祖母は“脳梗塞”という一つの病気から、多くの病院や人の中を渡り歩いた。もちろん、そのことが

◀子どもノフィクション文学賞 ◎

マイナスだとは思っていない。祖母にとつて多くの人に出会えたことは絶対にプラスだと思うからだ。しかし、祖母のような、脳に障害をもつたり、精神的に不安定になりやすい病気の人は、特に環境の変化に弱い。変化が良く作用することもあるが、その逆もある。専門家が専門分野をもち、互いの領域に足を踏み入れることは、それほど難しいことなのだろうか。勉強不足の自分には偉そうなことは言えないが、この先、僕は総合病院を超える、複合的な新しい専門の病院が多く増えることを望んでいる。近い将来、自分もその一端を担えるよう努力しようと思う。